青森聾学校　校長室だより

LOVE　青ろう

平成３０年１０月２６日 第１１号

青聾祭　さまざまな御協力に感謝しています。
ありがとうございました。

「みとめ合おう　仲間の気持ち
～学部をこえて心を一つに～」

このように奥深いスローガンにしたのは、なぜだろう。
３時間もかけて話し合ったのは、なぜだろう。
飾り物になりがちな「スローガン」やら「学校目標」やら・・・。よりによって、具体的でなおかつ困難な目指す姿まで、生徒会諸君は話し合ったのだ。

友達の良いところをみとめよう
自分の悪いところはみとめて直そう
個性を生かす場をつくりお互いを高め合おう

今の自分たちじゃだめだ、今のままの自分たちじゃなくて、もっと強くて温かい自分たちになりたい。そこを目指してみんなで頑張ろう、一人一人を大切にし合おう。
きっとそんな気持ちで真剣に話し合ったのだろう。ピュアで正義感の強い真っ直ぐな心に触れるたび思うのは、大人はどうなんだ、ということである。スローガンを実現するために必要なことは、子どもと共に目指す理想に近づこうと努力する大人の姿でもある。子どものの力を借りて大人も共に成長する。教育ってそういうことだ、学校ってそういう場所だと教えてもらった。ありがとう、青聾生。

幼稚部「うらしまたろう」

約束を破って玉手箱を開けておじいさんになった浦島太郎は、乙姫様から変身したドラえもんに助けてもらうのだ。ありがとう、乙姫えもん。

小学部「こちら青森聾学校前たけのこ交番」

怪盗ワリオをつかまえるために、ケンカをしていた所長と警部は自分の非を認め仲直りし、みんなで力を合わせて奮闘する。そして、ワリオをつかまえたのだ。

中学部「鏡の城」

自分の居場所がない不登校の５人は、鏡の城という場所で友達と出会う。心を寄せ合い「居場所」を見つけ心に強さを見いだした５人は、前を向いて歩き出す。

高等部「オレンジ」

未来の自分からの手紙。後悔のない人生を送ってほしい。そのために必要なことは、一歩踏み出す勇気、気持ちを伝えること。りこと共に写る写真の笑顔がまぶしい。

スローガンを心に職員と子ども達が創った劇は「生きる力」となりこれからにつながる。

青聾祭　各学部演目担当者の　*思い*

幼稚部　「うらしまたろう」　亀田 新也

幼稚部担当となって２年目ですが、「昔話」を取り上げる機会が少なかったなあと感じていました。また、これまで経験してきたこと（水族館見学、お店ごっこ、リズム運動で行ったダンスなど）や、それらを通して獲得してきたことばを盛り込んだ発表にすることで、自信をもって取り組むことができるのではないかと考えました。

何より、役を通して友達とやりとりしたり、ペアで動いたりすることで、子ども達同士の関わりをさらに広げてくれたら…そんな思いで進めてきましたが、みんなもてる力を存分に発揮していました。これからがますます楽しみです！

小学部　「こちら青森聾学校前たけのこ交番」　松倉 春香

未菜さんが好きだと話していた「こちら亀有公園前派出所」をベースにした劇にしようと考えました。また、４年生から外国語の勉強も始まるため世界の挨拶も取り入れたいと考えました。昨年に引き続き楽器演奏にも挑戦して欲しいと思い、みんなで一つの音色を奏でるカノンを選びました。主にこの３つの思いから生まれたのが、今回の劇です。ちなみに、たけのこ交番の「たけのこ」は、学部通信のタイトルからとりました。

初めて小学部で劇に挑戦する１年生、今までの経験を生かして励む４年生、主役という大役と大量のセリフにチャレンジした６年生。初めは、カンペを使用して練習したり、数多くの台詞に混同したり、カノンではキーボードや持ち替えのあるハンドベルに悪戦苦闘したりしていました。しかし、練習後半になると、役になりきって、表情や動き、話し方の抑揚や間をとる等、自分たちで考えながら演じる様子が見られました。

予行練習の時は、４人とも緊張しすぎの結果、今まで見たことのなかったミスが見られハラハラしました。（笑）しかし、本番では、今まで見た中で一番素晴らしい劇を披露してくれました。子どもたちの力って本当にすごいなと心から思いました。

中学部「鏡の城」小川智子

昨年度、高等部の劇に感銘を受けた６名は、「自分達も見ている人に感動を与えるような劇を演じたい」、「『みんなのために人のために』という中学部のテーマを伝えたい」、という思いのもと、時間をかけて話し合い、全員一致で発表の内容を決めました。例年よりも練習期間が短く、シリアスな場面の表現と場面転換の難しさに四苦八苦していたのですが、怒濤の追い上げでメキメキと表現力を身に付け、舞台上での自分の役割を果たした皆の表情は晴れやかでした。不安に押し潰されそうなときは、仲間を思い出してください。「どこかけで助け合える。負けないで大丈夫だから。」

高等部「オレンジ」山口真理子

生徒達で今年の劇のテーマは何にするかを話し合い、そして、そのテーマに合う作品を検討し、原作の「Orange」に決まりました。１０月から３週間弱の短期間での練習でしたが、アドリブを交えたり、この場面はこうした方がいいのではないかと演出を考えたり、自分達で工夫して演じました。舞台に立つ恥ずかしさや緊張に負けず、伸び伸びと演じ、特に自分のセリフのないアドリブ場面は、いつも楽しそうに演じていました。映像と舞台とで未来の現実世界とパラレルワールドとをそれぞれ演じ、お互いを認め合う友情や、苦手な事に立ち向かう挑戦・勇気を表現できたと思います。